

論 文 要 旨

学位論文題目 身体表現活動における保育者と子どもの対話的なかかわり合いの様相

氏名 鈴木瑛貴

本論文は、身体表現活動における保育者と子どもの対話的なかかわり合いの様相を明らかにすることを目的とする。

第1章では、D.N.スターンと鯨岡峻の理論に基づいて身体表現活動における保育者と子どもの対話的なかかわり合いの様相を考察した。身体表現活動において、保育者はイメージをもって言葉かけをし、子どもはその言葉の背後にある生氣情動¹を受け取り、その生氣情動を内包する動きを表現するというかかわり合いが考えられた。このような共有体験は子どもの表象に書き込まれ、暗黙の領域²に積み重ねながら、保育者と子どもの情動領域の共有が深まったり、戻ったりと変容していくと考えられる。

このような間主観的なかかわり合いは、互いの関係を変容させる力を持ち、二者の関係において非常に重要な意味を持つ瞬間であるが、常に間主観的にわかる状態であることが求められるわけではないと鯨岡は述べている。そこで挙げられたのが相互主体性という概念であり、間主観的にわからなくとも一個の主体として相手を受けとめるという関係である。このように相手を相手として受け止めることから対話的なかかわり合いがはじまり、その過程で互いが密接に情動を共有するような間主観的なかかわり合いが生じることもあり、ズレや不一致に気付いたり修正したり、相手を受けとめあいながら活動を共同創造していると考えられた。

第2章では、身体表現活動を実践する保育者3名にPAC分析を用いたインタビュー調査を行った。そこで挙げられた要素から、保育者と子どものかかわり合いの様相を再構築すると、かかわり合いの3つの形態が見出せた。

1つ目は、間主観的なかかわり合いであり、保育者が子どもの生氣情動を受け取りながら、子どもの情動に寄り添うような働きかけや、寄り添った上で自身の情動に巻き込んでいくような働きかけを行うことによって成り立つ。2つ目は、模倣によるかかわり合いであり、保育者の動きの外見的な形式を子どもが真似るものである。そして、このような体験が子どもの暗黙の領域に積み重ねられていくと、表象に積み重ねられたことによる新たな段階のかかわり合いが生じることがわかった。この時、保育者は情景描写によって表現対象のイメージを伝えるのに留まるが、子どもは今までの体験が積み重ねられた表象に接続することで、自ら動きを生み

¹生氣情動とは、スターンが提唱した概念であり、喜怒哀楽のようにカテゴライズできず、情動体験の領域内にはあるものの、“爆発的な”、“あせていく”など力学的、動的用語で表す方がぴったりくるような感情の形である

² スターンの提唱する概念であり、非象徴的・非言語的・行為的で、反省により意識されていない暗黙の了解が積み重なっていく領域。

出していくことができるのである。

第3章では、3名の保育者の身体表現活動実践を参与観察し、その記録から、保育者の言葉かけと動き、それに対する子どもの反応を書き出し、分析した。その結果、保育者の働きかけには、表現世界を生み出す言葉かけとそれに付随する動き、動きに焦点をあてた言葉かけがあることがわかった。表現世界を導く言葉かけの中で、擬音語・擬態語を使用しながらリズムを構築している場合には間主観的なかわり合いが生じ、子どもが動きのイメージをもっているが、擬音語・擬態語の発話に規則性がない場合や子どもの動くテンポと合わない場合、文章による情景描写の場合には、自ら動きのリズムを構築していく姿がみられ、これは表象が積み重ねられたことによる新たな段階のかかわり合いではないかと考えられた。この時、子どもの側も保育者の働きかけを受け止め、それに沿うように対応を紡ぐというようなかかわり合いが生じていることがわかった。

第4章では、継続的な身体表現活動の参与観察を通して、子どもの表現の変容プロセスを捉えた。その結果、身体表現活動を積み重ねていくと、動きや構成を洗練させていく過程で動きと表現対象のイメージの結びつきが失われ、表現対象のもつ生気情動が表出されなくなる場合があることがわかった。しかし、動きや構成を工夫・洗練させていった上で、保育者の働きかけによって再びイメージを取り戻すと、より多彩で密度の高い表現対象のもつ生気情動が表出され、豊かな身体表現が育まれていくというプロセスがあることがわかった。

結章では、各章の結果を基に、身体表現活動における保育者と子どもの対話的なかわり合いの様相を考察した。

保育者と子どものかかわり合いには、保育者と子どもが共に表現世界を生み出していくようなかかわり合いの形と保育者が子どもの成長を願って指導するようなかかわり方があった。前者は、模倣によるかわり合い、間主観的なかわり合い、表象が積み重ねられたことによる新たな段階のかかわり合いの3つがあり、それらを行き来しながら活動が展開されている。後者は、動きを豊かにしようとする過程で、表現世界のイメージが失われる場合があるが、保育者が子どもの反応を受けとめ、それに対して活動をデザインしていくことで、イメージを取り戻し、より豊かな表現を生み出していくことにつながっていた。

以上のことから、保育者と子どもの対話的なかわり合いとは、その瞬間ごとに言葉かけや動きによってかわり合いの形を変容させ、保育者と子どもが互いを受けとめあいながら共に表現世界を創りだしていくものであると言えよう。また、保育者が子どもの成長を願って指導するようなかかわり合いにおいては、保育者から子どもへの一方的な働きかけにもなりうるが、その中でも子どもの反応を受けとめ、それに対して活動をデザインしていくことは、対話的なかわり合いの1つであると考えられる。